

生涯の友 映画

野口幹夫

1、映画鑑賞遍歴

思えば小学校の頃から映画ファンだった。父にたびたび連れられて近鉄の地下にあった劇場で映画をみた。父は長谷川一夫や板妻が好きだったようだ。何も覚えていないが一つ奇妙なシーンを覚えている。それは時代劇の人気喜劇俳優が戦闘機のパイロットになって、得意のギャグ「あのね おっさん わしゃかなわんよ」を飛ばしながら急降下して敵の攻撃に参加するのだ。戦時下の戦意高揚映画だった。本番の映画の前にニュース映画と短編の漫画映画があった。タンクタンクローヤ、ちびくろ1等兵などそれも楽しかった。

中学校時代は不思議と映画は縁遠くなったが、高津に入ってから復活する。難波にオリオン座という小さな映画館があった。入口に並んで開場を待って入った映画は「ひめゆりの塔」だった。「ライムライト」「シェーン」「禁じられた遊び」もここでみた。高津は新聞部にいたが、新聞広告を取りに行くためと称して、伊藤（旧姓安保）と二人で阿倍野のアポロ座に行った。広告は取れなかったが、映画館の事務所からそのまま劇場の中へ流れ込んだ。2階の特別席がすいていたのでそこに座って映画を見せてもらった。映画は「頭上の敵機」だった。グレゴリーペック主演だった。

青春時代の記念すべき映画は「アラビアのロレンス」日比谷映画館だった、妻になってくれた彼女とのデート映画だった。長男が生まれ、その赤ん坊を連れて行くしかなくて、川崎の映画館で時々席を外しながら見た映画は「ミクロの決死圏」

映画館などない太子町に転勤してからは、映画は遠のいたが、時に神戸市内まで足を運んでみた映画が『バリーリンドン』だった。

2, 見る仕掛け

劇場で見る映画は非日常のイベントであった。それが一変したのが衛星テレビの衛星映画劇場が始まったことだ。洪水のように名画が押し寄せた。あまりに日常的になると感激もない。

そこでせめてもの雰囲気を作ってみるべく我が家のリビングルームに 100 インチのスクリーンにプロジェクターで投影するホーム映画シアターを作った。録画しておいてみると、時間に縛られないし、CM は早送りでかわせる。日替わりメニューで洋画・邦画・アニメの名作を見まくった。チャップリン　マイフェアレディなどのミュージカル、男はつらいよ全 40 作　黒沢作品　ジブリのアニメ映画……

2 年前ようやく EL テレビの 48 型が出たので購入した。液晶テレビでは黒の沈みが出ないが、EL テレビは理想的な映画画像を提供してくれる。カーテンを閉めれば十分だ。吊り下げプロジェクターは撤去した。

3, 映画の作り手に接する

茅ヶ崎に住んでいると映画の作り手に接する機会がある。以下はかつて高津 5 期 HP の掲載した「湘南海岸を歩く」の 1 節を転載する

『茅ヶ崎は松竹大船撮影所が近かったためか、映画関係者が住んでおられたり、ゆかりの地があったりする。小津安二郎監督が構想を練り脚本を書くために宿を取ったのが茅ヶ崎館。訪れる客は、その部屋を案内してもらえし、希望すればそこに泊めてもらえもする。ここで、『晩秋』『麦秋』『東京物語』が書かれたというが、色紙の一つもないただの和室である。

有名人の足跡は大抵にぎやかに飾られるが、何もないのが、かえって宿屋として自然で、また小津監督のことをあれこれと想像をすることが出来る。



さて小津さんの映画に茅ヶ崎海岸がどう撮られているかを見てみたい。小津作品は多く見ているが、茅ヶ崎海岸がよく撮ら

れているのは、『長屋紳士録』『早春』である。『長屋紳士録』は昭和22年の作品である。その復刻版を手に入れて何回も繰り返し見た。

戦後の混乱が続く東京の下町長屋に、親にはぐれた子供が連れてこられることから物語は始まる。子供を連れてきたのは、大道八卦見の若い笠智衆。彼は独身で、部屋住みの身であるので、子供の面倒は見る事が出来ないと、荒物屋の飯田蝶子に無理矢理この子を押し付ける。はぐれた父親は、八王子の大工だが、今どこにいるかわからない。食糧難で小麦粉の配給などで凌いでいる飯田蝶子にすれば、捨てられたのかもしれない子供をいつまでも面倒を見ることは出来ない。問いただすと、この子は東京に来る前、茅ヶ崎のおばさんのところ

にいたと言う。彼女は早速子供をつれて茅ヶ崎まで行く。そのくだりで、当時の茅ヶ崎海岸がたっぷりと撮影されているのだ。訪ねる先は、今も網元がたくさんいる茅ヶ崎の西、南湖の漁村のようだ。そこで訪ねたおばさんというのは、親類でもなく、その父親の大工が、しばらくここで仕事をしていただけだとわかって、子供を置いていくことも出来ない。やむなく二人は広々とした海岸に出て、握り飯を食べる。カメラは飯田蝶子を写すときに江ノ島をいれ、子供を移すときは、遠方に箱根をとらえる。

そこで映された、箱根の大涌谷からは盛大な白雲が上がっているのがわかる。今は、煙はまったくないが、二〇〇三年に一時、黒い噴煙がまっすぐに上がったので、その同じ場所とわかる。彼らが座る浜辺の前方には、烏帽子岩は写らず、平島と呼ばれた岩の群れが見える。今は茅ヶ崎港となって、突堤ができ、平島もコンクリートで半ば固められたので、映画のようには今は見えない。その位置関係から、西の方にある南湖の漁村を訪ね、茅ヶ崎駅に戻る途中で海岸に出たということがわかる。ここは、小津監督が定宿とした茅ヶ崎館も近いところだ。

海岸は広々として、アップダウンの変化に富んだ砂浜が映し出される。当時は一三五号線もなく、茅ヶ崎館の裏庭から直接海岸に出ることが出来たのだから、広々とした砂丘が海まで続いていたのだ。

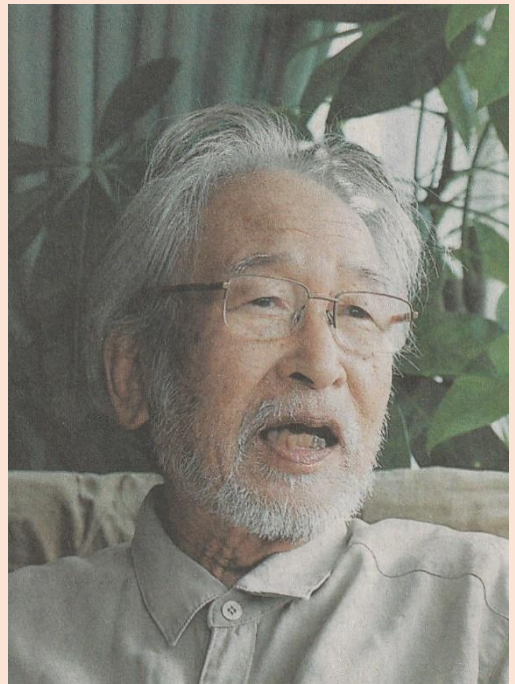
飯田蝶子と子供は、落胆して長屋に帰ってくる。子供の背中に、芋が三kグラム背負わせてある。茅ヶ崎の駅前で売っていたから買って来たという。当時海岸は芋畑だったそう。ついでながらわたしの家もその頃は芋畑だったと聞いている。「茅ヶ崎からの帰りの列車は

大変で、窓から乗ったんだよ」とこぼす。戦後の姿であった。』(以上転載終わり)

最近 NHK のアナザーストーリーで大島渚監督を取り上げていた。気が付いたが大島作品は「戦場のクリスマス」以外の問題作は見していない。これから見る楽しみが増えた。この大島監督にも妻の小山明子にも辻堂茅ヶ崎の駅のプラットフォームで見かけている。やはり目立って存在感があった。しかし声をかけたりもしなかった。

森崎東監督は近くに住んでおられ、お話しし交流できたのである。8歳上だったが一昨年亡くなられた。これも「湘南海岸をあるく」から引用しよう。

『茅ヶ崎は松竹大船撮影所が近かったから、松竹の映画人が多く住んでいらっしゃる。森崎東監督もその一人だ。監督も湘南散歩の常連だ。のっしのっしと歩かれる姿を見るといかにも映画監督さんだと思う。丁寧にご挨拶をすると、監督さんも懇篤に返してくださる。奥さんとお二人で歩いて居られる時もある。もう長い顔見知りなので、きっかけが何であったか忘れてしまったが、奥さんとわが女房とは、野菜の共同購



入で先に知り合っていたことからかも知れない。お二人とも気さくな方だ。ある日ウオーキングを終わって公園で体操をしていたら、後ろから「もう行きましたか？」と声かけられた。一瞬今日は湘南クラシックカーラリーでも通る朝だったのかなと変なことを思って、「何がですか？」ととっさに聞き直した。聞けば監督さんの奥さんのことだったのだ。「何が？」

と物のように聞き直したのはまずかったと苦笑しながら、「いえ、お会いしませんでした。」

「それじゃ急がなくっちゃ。」と追いかけて行かれた一幕があった。普段はおはようございますの挨拶を交わすだけなのが、ある朝は監督さんがわざわざ立ち止まられて、「きのうは坊ちゃんが近くの小学校で講演されたそうで、残念ですが聞きにいけませんでした。」と挨拶されたことがあった。八才も先輩なのに慇懃な方で恐縮してしまう。島原のお生まれで、五高から京大への英才だった。学生時代は筋金入りの左翼運動で、そのために就職に苦労されて、曰く因縁あって松竹に入られた。脚本部や助監督時代も労働運動に活躍されて、監督の聲がかかったときも渋々なられたという曲折の多い人生を歩まれたと聞く。私はこういう人が好きだ。

しばらく湘南散歩に見えないことがあって、その後お見かけした時に、お声をかけたら「今撮影が進行中で忙しくなりました」とのこと。作品をお聞きしたら「ラブ・レターという作品で、もうすぐ公開されますから見てください。」と、公開の予定を教えてくださいました。封切りの日、茅ヶ崎の映画館に女房といそいそと出かけた。中井貴一の主演で、不法滞在の中国人女性の哀れな話で、二人して涙の感動作品だった。涙したのは作品に打たれたばかりではない。観客がたったの八人だったことに悔し涙もしたのだ。このすばらしい作品が、松竹映画の経営難のためか宣伝が不十分だとしか思えなかった。森崎監督の作品は、黒沢脚本の「野良犬」や「男はつらいよ」の第3作、夏目雅子の「時代屋の女房」「お美味しんぼ」「塀の中の懲りない面々」などなど、庶民派の喜劇でも有名。また忙しくなられ、ひととき湘南海岸ウォーキングの常連から離れられる日が来るといいなとも思う。』(以上転載終わり)

これを書いてから10年たった。その後のことを追記する。

2003年に「ニワトリはハダシだ」という映画を作られた。舞鶴を舞台に知的障害の男子と在日韓国人の母の物語だ。その初上映会が中野の映画館であって監督が挨拶に出られるとあって、そこに出向いてお会いした。わざわざ来てくれたと喜んでくださりプログラムや著作本をくださった。さらに2013年には「ペコロスの母に会いに行く」を製作された。この映画は長崎や森崎監督の故郷島原が舞台で、認知症の母の世話をする漫画家サラリーマンの話だ。禿げ頭がペコロスという小さい玉ねぎに似ていことから題名がついた。この作品は漫画でも良く知られている。この作品はヒットした。公園でお目にかかったとき、次はどんな作品を計画しておられますかと聞いたら、「731部隊をやろうと思っています」といわれた。期待していますといったが、残念ながらそれは実現しないまま2020年に亡くなられた。監督が行かれる床屋は、私も常連で、よく監督の近況を聞いた。最後は車いすに乗って調髪にこられていたそうで、奥様がよくサポートされていたと聞いた。

4、妻との思い出話

映画のこととなれば二人の共通の話題は尽きない。特に印象に残る題名を挙げあった。とめどもなく出てくる。分類も順番もない。思い出すまま気の向くままに挙げあった映画の題名

ベンハー 赤い靴 南太平洋 ウェストサイドストーリー ホフマン物語 戦争と平和

ひまわり 自転車泥棒 ファンタジア 地上最大のショー わが谷は緑なりき 慕情

雨の朝パリに死す 天国の階段 聞けわたつみの声 オペラ座の怪人 灰とダイヤモンド
嵐が丘 若草物語 マイフェアレディ サウンドオブミュージック モダンタイムス
羅生門 椿三十郎 泥の河 蒲田行進曲 第三の男 風の谷のナウシカ 誰がために鐘は
鳴る 青い山脈 となりのトトロ 鉄道員 ライムライト ドクトルジバゴ 黒水仙
天井桟敷の人々 アマデウス 千と千尋の神隠し カルメン故郷へ帰る 会議は踊る
彼岸花 戦艦ポチョムキン 80日間世界一周 コーラスライン スターウォーズ 太陽
はいっぱい オーケストラの少女 この世界の片隅で 黄色いボタン 魔女の宅急便
アンナカレーニナ キリマンジェロの雪 ライアンの娘 飢餓海峡 バリーリンドン 望
郷 美女ありき ヴェニスに死す 日の名残り レミゼラブル ジーザスクライストスー
パースター もものけ姫 影武者 七人の侍 ナバロンの要塞 ダヴィンチコード ライ
フイズビューティフル 乱 キネマの天地 イースターパレード アンタタッチャブル 駅
馬車 ほたるの墓 天空の城ラピュータ 時代屋の女房 屋根の上のヴァイオリン弾き
帰らざる河 アポロ13号 東京物語